

日吉大社自然観察倶楽部通信

No. 2 1 草木染めのおもしろさはどこにあるのか？

平成24年7月16日

7月13日の日曜日、日吉大社自然観察倶楽部の恒例となりました草木染めを楽しみました。いままでは秋に行っていたのですが、今回は季節を変えて夏に行い、「茶」「松」「ベニカナメモチ」を使って行いました。

私たちは、日吉大社の杜で活動させていただいて、私たちの生活を見直して、自然と私たちの生活に結びつけていきたいことを目指しています。その一つとして、日吉大社の植物を利用して草木染めを行っています。日吉大社の植物を観察してみるとカツラ、フジ、サクラ、モミ、マツ、スギ、カエデ、アラカシ、エノキ、ムク、カキ、チャ、イチイガシ、ナナミノキ、などとあげればきりがありません。そのなかから、今回は「茶」「ベニカナメモチ」そして、「松」を選びました。



〈左から、茶・ベニカナメモチ・松〉



「茶」は、媒染には、「ミョウバン」を使用しましたところ、鮮やかな黄色の染液がとれて、布も鮮やかな黄色に染まりました。「ベニカナメモチ」においては、先に草木染めを実践しておられる結果を見ると、ピンク色に染まっていた。しかし、今回、やってみるとうまくピンク色には染まらず、黄緑色に染まりました。なぜなのでしょう、と私たちは考えました。しかし、今のところ不明です。今後考えていきたいと思っています。

さて、「松」です。「松」は今回で三回目です。一回目に行ったとき、全く予想外の色が出て、すごく驚いたことを覚えております、ただ、その驚きと同時に、どうしてもシミが出てくるという残念な結果が出てきました。どうも、松にある油脂が原因のようです。この油脂を取り除きたいという気持ちを持ちました。上手くいかなければ、「松」を扱うことをやめるという選択もあるのですが、日吉大社において、「松」と言えば、「唐崎の松」があるように、非常に大切な植物です。何とか、「松」をうまく染めてみたいという気持ちを持っています。草木染めの書物を調べてみると、「松」を使っての草木染めというのは私が調べたところでは出てきません。それほど、難しいのでしょうか。

今回は、会員の中のSさんから事前に次のように作業を進めれば良いとアドバイスを受けていました。

1、染料液の作成：松葉に最小量の水を加え加温15～20分煮沸（落とし蓋をし、

上から石で押さえつけて松葉全体が水に浸るようにする) 室温に冷まし、油用フィルターで濾過する。

2, 灰汁媒染液の作成: ポリバケツに3分1ほど灰を入れ、水を加えてバケツを満たしよくかき混ぜたあと放置する。一日おいた後上澄みを取り布濾過してごみを取り除き完成させる。

活動当日は、Sさんはご用があつてお休みになられました。その結果、残念ながら、指示とおりに実施していなかったようです。後日、指摘された点は、染料液を作るときに、充分冷まさずに濾過したのが失敗、また同じフィルターで濾過したことも指摘されました。また、染料液から引き上げた後の水洗いを省いたことも指摘されました。次回はぜひSさん立ち会いのもとでがんばります。



〈茶〉



〈ベニカナメモチ〉



〈松〉

草木染めを実施する楽しみってなんでしょう。大きくいって、次の二つではないでしょうか。

①まずは、一つの植物からどんな色に染まるのかといった驚きとおもしろさ。

②自分が染めた布を使ってみる。

今回、①の段階でうまくいきませんでした。だからといって、私は失敗とは思ってはいません。むしろ、むずかしい、上手くいかなかったからこそ余計に面白いです。うまくいくまでチャレンジできる楽しみがあるからです。自然相手に思うようにいくという考え方が私たちの思い上がりなのでしょうね。きっと答えは自然が持っているものであって、その声を聴くべきなのでしょうね。上手くいくまで挑戦しているときが一番楽しいです。



左の写真を見てください。一本のもみの大木を真っ白に染めて、覆い被さっている植物を日吉大社の境内で発見しました。モミの木の高さが約20mでその半分以上を覆っています。まるで、白い衣服をまとったもみの木ですね。テイカカヅラとツルアジサイ(写真下部の辺りでちょっと大きめの花)です。マント植物と言われますがまさにその通りです。日吉大社の杜はやはり湿気を多く含んだ環境になっているのですね。

*日吉桜はますます「ふるさとの木」になっていきます。今度、日吉桜は、日吉中・比叡山中・坂本小・下阪本小・雄琴小・日吉台小に贈呈されることが決まったからです。学校に植えられて、子ども達に毎日見つめられて育てていくことになりました。桜が休眠状態になる今年の冬に植えます。